

《論文》

## 漢詩実作教材「漢詩カード」試論

中学校・高等学校での教材として

高芝 麻子

### 1、先行実践

中学校や高等学校の国語の授業では、俳句や短歌、口語自由詩などの実作を行うことがある。例えば、高等学校の現行の指導要領の「国語総合」内容「書くこと」の活動の具体的な内容として(2)アに「情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること」とあるように、詩歌を作ることは国語の学習範囲に含まれており、実作を行うことで表現力を養えるのみならず、生徒がその文学ジャンルに親しみをもち、理解を深めることが期待されるためでもあろう。

俳句や短歌、口語自由詩ほどには一般的ではないが、漢詩の実作についても、中学校や高等学校の授業において様々な実践が行われており、管見の限り以下のような報告がある<sup>1</sup>。

森野知子「漢詩を作る 漢文に親しませるために」(『国語教育研究』39、pp77-86、1996)は、高校二年生を対象とし、漢詩の読解とあわせて七時間をあてる。日本語で作った詩を五言絶句などにならって漢字に置き換え、押韻や平仄は扱わない。

江川順一「漢詩創作の授業」(『札幌国語研究』4、pp17-27、1999)は、高校二年生を対象とし、漢詩単元のまとめとして四時間をあて、実作を行っている。既習の漢詩を換骨奪胎する形で詩を作り、韻については日本語の音読みに基づく。

小嶋明紀子「高等学校における漢詩づくりの実践」(『新しい漢字漢文教育』51、pp 121-127、2010)は、高校一年生、二年生を対象とし、漢詩単元のまとめとして四時間をあて、詩語表などを用いると同時に、実作者である小嶋氏の丁寧な指導をも受け、一人一人が述べたいことを七言絶句で表現することを目指している。

田邊閑雄「高校生の漢詩詩作実践」(『新しい漢字漢文教育』62、pp58-66、2016)は、有志の高校二年生に対する補講として行われた活動である。日本語で作った四行の詩を、実作者である田邊氏の指導を受けながら漢字に置き換えて、平仄

・押韻の規則を守った七言絶句を作らせている。

これらの実践報告からは、漢詩実作に際しての様々な困難が浮き彫りになる。中でも最大の困難は、平仄や押韻をどう処理するかという点であろう。教科書で学ぶ絶句や律詩は近体詩であり、平仄と押韻について厳密なルールが定められている。それを度外視しては近体詩とは見なし得ないが、生徒が自力で正しく押韻し、平仄の合う詩を一から作るということは時間の限られた授業内では難しい。小嶋氏、田邊氏のように実作経験の豊富な教員が指導するのであれば、必要かつ正しい詩語を適宜示すこともできるが、授業としての難易度は高くなる。そのため、森野氏や江川氏らの実践で近体詩という詩型にこだわらずに詩作を行っているのは、現実的な方法であると言えるだろう。

もちろん、小嶋氏らのように詩語表、ないし詩語集<sup>2</sup>を用いるという方法も効果的である。詩語表の語彙を用いて作詩することになれば、与えられた詩語の範囲内で詩を組み立てることとなり、表現できる内容がいくらか制限されるという側面はあるが、平仄や押韻を守り、詩型を学ぶという目的に即して考えたときには、比較的容易で、行いやすい方法であると言える。

つまり、授業という限られた時間の枠内で漢詩を作らせる場合、漢詩で自身の述べたいことを表現することを重視して近体詩の規則を度外視するか、平仄や押韻に注意を向け近体詩を作ることを重視して内容は措くか、いずれかを選ぶことが現実的な方法と言えよう。漢詩に親しむという点では、いずれの方法にもそれぞれの利点がある。

本論は後者の立場から、中学校・高等学校の二校時程度の授業時間内で、実作経験の乏しい教員にも実践可能な、近体詩の形や構成を理解させ、漢詩に親しませるための、漢詩実作教材を提案するものである。

2、教材の概要

教材の概要を説明する前に、日本人の初学者がどのように漢詩を作っていたのかについて、確認しておきたい。日本では江戸時代の後半から明治前半にかけて、漢詩愛好者は庶民層にまで広がり、実作人口も大幅に増え、詩語集を初めとする作詩のための教本も大量に出版されていた。

明治の文人として名高い正岡子規（1867-1902）も親友の夏目漱石と同様に多くの漢詩を残している。彼の処女作「聞子規」詩は、数え年で十三歳のときの作品である。

「聞子規」 子規を聞く  
 一声孤月下 一声孤月の下  
 啼血不堪聞 血に啼きて聞くに堪へず  
 半夜空欹枕 半夜空しく枕を欹つ  
 故郷万里雲 故郷万里の雲

孤独な旅人が月明かりのもと、ホトトギスの声を聞き、故郷を思うという題詠の作であり、平仄にも押韻にもおおむね破綻がなく<sup>3</sup>、意味も明瞭である。十代前半の正岡子規がこの処女作を作り上げた状況や手順は、清水房雄「『幼学便覧』私考」<sup>4</sup>、佐藤利行「正岡子規の漢詩」<sup>5</sup>などによってすでに明らかにされている。その指摘を踏まえ、子規の作詩方法を確認したい。

五言詩は〔二文字＋三文字〕で構成されることから、この詩に用いられている詩語は「一声」「孤月下」「啼血」「不堪聞」「半夜」「空欹枕」「故郷」「万里雲」の十個と見なすことができる。子規はこの十個全てを詩作の教本『詩韻碎金 幼学便覧』<sup>6</sup>の夏部「客舍聴子規」<sup>7</sup>から選び取り、詩を組み立てているのである。

『詩韻碎金 幼学便覧』は詩語を四季の部立てに分け、詩を作る場面ごとにさらに細分化した項目を立て、項目ごとに二文字と三文字の詩語を羅列し、実際の作例を附す体裁の詩語集である。仄字には黒丸●が附されており、平仄が一見して分かるようになっている。子規が参照した項目「客舍聴子規」は旅の宿りにホトトギスの声を聞いたという場面設定であり、二文字の詩語が四十四（二文字目が仄のもの二十二、平のもの二十二）、三文字の詩語が三十（齊韻八、文韻十二、転句十<sup>8</sup>）収められている。そこに採録された詩語を組み合わせれば、その場面に即した詩が作れるようにで

きており、子規はそこから十個を選び取って、作品として組み上げたのである。つまり、子規は自身の知識や発想の中から詩語を選択したのではなく、教本にある既存の詩語を並べることで処女作を作ったと言える。

(図1 『詩韻碎金 幼学便覧』嘉永二年新版)



そもそも詩語集とはそのために編集された書籍であり、詩語集にある詩語を並べて漢詩を作ることが、初学者にとって一般的な作詩方法であったと考えて大過ないであろう。

つまり、初学者が詩語表や詩語集を使って漢詩を作るとは、漢詩の習得の道筋として合理的なものである。もちろん詩語集の語彙のみを用いて詠いたい内容をそのまま詠うことは難しい。数え年八歳のときから漢学塾に通っていた正岡子規でさえ<sup>9</sup>、「詩語粹金一冊を探りて形式的に漢詩を作

りし十余歳の時は自己の嗜好を十分に現し得べきに非ざれば論ずるに足らず」と述べている<sup>10</sup>。それまでも漢詩を多く読み、リズムや雰囲気などをあらかじめ理解していたであろう明治前期の初学者に比べ、現代の中学生・高校生には漢詩に触れる機会はそう多くはない。漢詩という文体そのものを把握しきれていない状態で、詩語表や詩語集から詩語を個人で選び取り何かを表現するという作業には、ややハードルが高いと感じる生徒もいるだろう。

詩を実際に作ることによって近体詩の構成を知るという点を、本教材の目的とする以上、なるべく「詩を実際に作る」という段階で困難が生じることは回避したい。そのため、個人ではなく、グループワークの形式で、詩語をカード化した教材（以下詩語カード）を用いる授業を提案したい。詩語をカード形式にするのは、詩語表・詩語集と同じ機能を備えたまま、なすべき作業手順や現在の進捗状況を可視化することで共有しやすくし、グループワークに適したものとするためである。

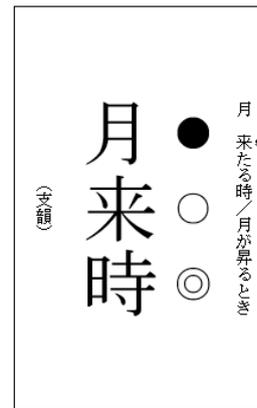
具体的には近体詩の基本的なルールとして、二四不同、二六対、粘法、反法、押韻の五つを守った詩を作り、その構成を理解することを目的とする<sup>11</sup>。ここでは初学者が作りやすい詩型である七言絶句<sup>12</sup>を作る前提で議論を進めたい。

漢字は平字と仄字に分かれる。これは中国語(中古音)の発音に由来するものであり、漢和辞典を調べれば、その字が平仄いずれに当たるのかを知ることができる。また、正岡子規の使った『幼学便覧』にも仄字に黒丸を付けるという形で平仄を明示してあったように、現代に到るまで詩語集の多くが採録詩語に平仄を併記しており、作詩時の助けになっている。それを踏まえ、詩語カードにも同様に、平字は白丸○、仄字は黒丸●という伝統的な方法で示すこととした。

この平仄と関わるのが二四不同、二六対、粘法、反法である。二四不同とは各句の二文字目と四文字目の平仄が別のものであること、二六対とは二文字目と六文字目の平仄が一致することを言う。反法とは奇数句・偶数句と並ぶとき、二四六文字目の平仄が隣り合う句と反対になること、粘法とは偶数句・奇数句と並ぶとき、二四六文字目の平仄が隣り合う句と一致することをいう。

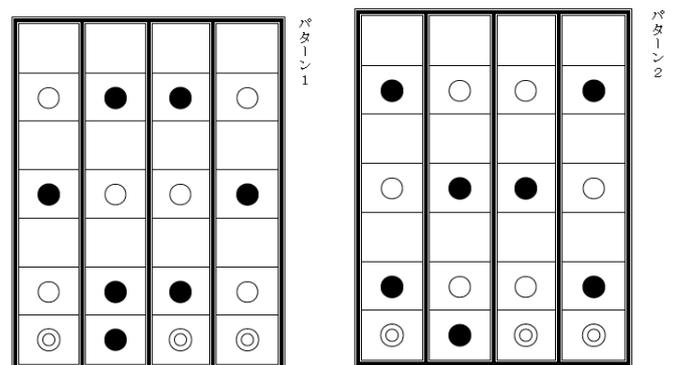
また、韻字は◎で示すが、七言絶句の場合、一、二、四句で押韻をすることになる。カードのセットを作る段階で韻を一つに定めてあれば、「韻字があるカードを韻字の箇所に置く」ことで押韻が可能になるが、複数の韻目を混在させたセットを用いれば、韻字を考え、相応しいものを選びながら詩を作らせることもできる。漢詩カードのレイアウト例（韻目記載あり）を図2に示す。

(図2 左から韻目、詩語、平仄、書き下し/大意)



以上の五つのルールをまとめると次のようになる。第一句の二文字目を平字にすればパターン1（平起式）となり、仄字にすればパターン2（仄起式）となるが、いずれで作っても問題はない。

(図3 平起式と仄起式)



七言詩の場合、〔二文字+二文字+三文字〕で構成されるため、図3の双方のパターンに対応できるようにするためには図4に示す六種類が必要となる。なお、この六種類があれば、七言・五言、律詩・絶句という近体詩の主な詩型のいずれにも対応できる。

(図4 六種類のカード)



- ①二文字 (二文字目が平)
  - ②二文字 (二文字目が仄)
  - ③三文字 (押韻・二文字目が平)
  - ④三文字 (押韻・二文字目が仄)
  - ⑤三文字 (転句・二文字目が平)
  - ⑥三文字 (転句・二文字目が平)
- ※番号は実際のカードには書かれていない

詩語カードは、主に『詩語完備 だれにもできる漢詩の作り方』<sup>13</sup>所収の詩語を参照して作成した。当該書籍は詩の作り方の解説と詩語集から成る。詩語集は四季および雑の部立てを持ち、さらに下

位分類として作詩の状況を設定している。『幼学便覧』などと非常に近似した体裁である。詩語カードを作るにあたっては季節単位で一つのセットとなるようにした。例えば春のセットのカードを使えば、春の漢詩ができることになる<sup>14</sup>。

詩語カードは季節ごとにおおむね以下の枚数で構成している。

- ①二文字 (二文字目が平) 六十枚
- ②二文字 (二文字目が仄) 六十枚
- ③三文字 (押韻・二文字目が平) 四十枚
- ④三文字 (押韻・二文字目が仄) 四十枚
- ⑤三文字 (転句・二文字目が平) 三十枚
- ⑥三文字 (転句・二文字目が平) 三十枚

この全二百六十枚のカードを班ごとに配り、また二種類のパターン(図3)を記載したプリント、作品を記録する用紙を全員に配布して実作の授業を行った。

### 3、漢詩カードを用いた授業実践

本章では主に大学二年生および高校一年生に対する実践について報告する。

ここで、授業目的が「近体詩の形を理解すること」であり、「そのために作詩を行うこと」を改めて確認しておきたい。近世までの詩作入門者であれば、詩作を行う前にすでに多くの漢詩を読み、詠われる情緒や構成、詩語や詩型に親しんでいることが想定される(①)。その上で平仄や押韻などの近体詩の詩型のルールを理解し(②)、実作する(③)ことになるのであろう。しかしこの詩語カードを用いた授業では本来の流れを逆に進めることになる。つまり、近体詩の形を理解するために作詩を行うという流れは、③をまず行うことで、②の理解に到達させるということである。次のステップとして、その理解を踏まえて漢詩により親しむ(①)という段階に至ることを想定している。そうである以上、漢詩世界への深い理解のない生徒・学生の実作となることから、作品としての完成度、つまり芸術性や達意については度外視せざるを得ない。また、詩語の適切な使用ができていないか、漢文の語順として妥当かなどについても、この段階で指導することは難しいこともお断りしておきたい。もちろん、漢詩カードに慣れれば、詩語集の活用も容易となるため、継続的な

実作を経て独力で達意の詩を作れるようになることは大いに期待できる。

上記の前提に立ち、大学での実践は、2016年度、2017年度の二年にわたり、横浜国立大学教育学部学校教育課程の「中等国語科教育法 B」の中で行った。この授業は中学校・高等学校の国語科の教員免許取得のための必修科目の一つであり、主に二年生が履修する。履修者は例年二十五人程度、授業時間は九十分である。

授業では冒頭の二十分程度で、幕末から明治期前半に漢詩が盛んに作られていたこと、正岡子規が『幼学便覧』を用いて十三歳で漢詩を作っていることなど、漢詩の基礎的な知識を確認し、七言絶句の平仄や押韻について、簡潔に説明した。ただし、平仄や押韻の概念については中国音（中古音）に由来するもので、漢和辞典で確認できることなどを伝えるに留めた。

その後、四人から六人の班を作らせ、班ごとに一セットずつカードを配布して、実作に当たさせた。カードを六種類に分けさせ、最初一枚をどの山から取るかを確認し（平起式・仄起式いずれでもよい）、班ごとに一つずつ作品を仕上げるよう指示を出す。そのとき、二四不同、二六対、粘法、反法、押韻を必ず守ること（必要に応じて同字重複を避ける、孤平を避けるなどのルールも追加）に加え、作品がどのような意味になるのか考えタイトルを付けるよう指導すると、まとまった内容の作品を作りやすくなる。

実作の間、班の状況に即して机間指導を行う。特に問題となるのは、時系列や天候の齟齬がないか（雨が降っているのに月が明るく照らす、昼間なのに天の川が見えるなど）、作中人物の言動に矛盾はないか（道を歩いていたのに次の句で眠っているなど）などに注意を向けさせることである。ただし、漢詩の表現として稚拙であっても、学生・生徒たちが作品の内容を説明できる場合には、それでよしとする。

班によって必要時間はまちまちであるが、ルール重視で内容に深入りしない班では十分、ある程度内容を吟味する班でも三十分あればおよそ形にはなる。三十分以内に作品のタイトルと本文を板書するように指示すれば、残りの三十分程度を書き下しと内容確認、評価の時間にあてることがで

きる。実際の作品を見ていこう。

(図5 作品の板書)



作品例：「秋の景色」

読書独愛似淵明

書を読みて 独り愛す 淵明に似るを  
菊発西郊徹底清

菊は西郊に発き 徹底清し

紅葉秋光千里夢

紅葉 秋光 千里の夢

新涼孤雁白雲生

新涼 孤雁 白雲生ず

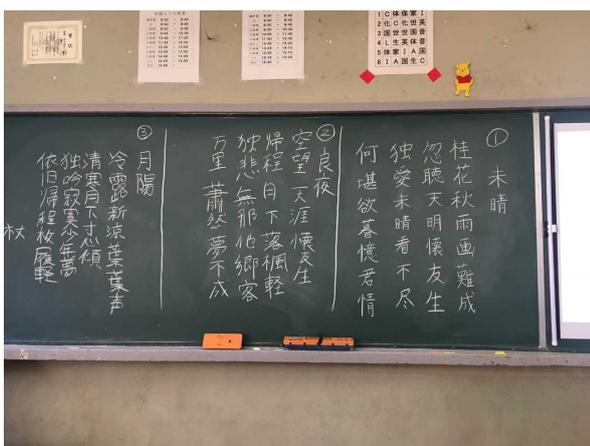
学生たちはほとんど漢文学に関する知識がないため、陶淵明が隠者であること、菊の縁語として詩に詠われることなどは、知らずに組み合わせたようである。だが、俗世を離れ隠者めいた心地で読書する楽しみを、陶淵明の生活に重ねることで、屋外の菊の花に意識が向かい、そこから紅葉、秋の日差し、と千里先まで視野が開け、最後に視線を上げて秋空に雁の姿と雲を見出すという、自然な流れができています。教員が視線を追って当該作品の流れの面白みを指摘すれば、学生たちに自身の詩がどのように受け止められたのかをフィードバックできる。つまり学生は詩を作る体験に加え、その詩を読まれる体験も味わうことになる。漢詩はコミュニケーションツールであり、明治前半くらいまでの社会においては多くの場合、詩を作る人と読む人との間にさほど大きな断絶はなかった。長らく日本国内においても双方向的なコミュニケーションツールであった漢詩という文化の、一つの在り方に触れることができるのである。

中学あるいは高校の国語の教員免許を取得しよ

うとしている大学生であっても、漢詩は自分たちには作れない難解な文学ジャンルであると考え、あるいは日本文化と関わらない他者の文学と捉えて地理的・時代的・心理的な距離を感じている者が多い。しかし実作を体験し、近体詩のルールを守った作品を実際に作ることができること示すことで、授業後には、漢詩を作るのは意外と楽しいという気づきや、共感にくいジャンルであった漢詩への抵抗が薄れたなどの感想が、リアクションペーパーに散見する。また、自身の作品を教師が読み解いてくれたことが嬉しかったというような、コミュニケーションの成功を感じ取った学生もいる。漢詩カードを組み合わせた作詩ではあるが、近体詩の詩型を学びながら、漢詩を作るという試みにより、漢詩との心的な距離が縮まることも期待できるのではないだろうか。

2017年、同様の授業を神奈川県立大磯高等学校の一年生に対し、行う機会を得た。大学模擬講座という行事の一環として十二月上旬に七十分行った。授業は同じ内容を二回行い、参加生徒は全員入れ替わって初回十二名、二回目十三名であった。前半の知識の確認を簡易化し、詩作の時間もやや短縮したが、大学での授業とほぼ同様の流れで実施した。図6は当日の作品である。

(図6 作品の板書)



作品例：「良夜」

空望天涯懷友生

空しく天涯を望みて 友生を懐う

歸程月下落楓輕

歸程 月下 落楓輕し

独悲無那他郷客

独り悲しむも那ともする無し 他郷の客  
万里蕭然夢不成

万里 蕭然として 夢成らず

友を思いつつ、故郷から遠く離れた地の果てのような土地を旅ゆく者の詩である。彼はその悲しみをもてあまし、眠りについて夢を見ることもできずにいる。この詩に対し、高校生たちは漢詩カードの中にあつた語を用いて「良夜」という題を付けた。彼らによれば、その夜は美しい夜だったからこそ、旅人は普段より余計に寂しくて辛かったのだという。カードの意味を見ながら作詩すれば、そこに描かれる情緒、流れをある程度は把握できることが、この題名を付ける作業からも確認できると言えるだろう。

授業後の感想からも、内容まで考えて作った様子が窺える。以下に高校生の感想を引用したい。

- A 自分は漢詩など日本文学が盛んなのは平安時代くらいかなと思っていたのですが、明治と聞き、今では気軽に作るののない漢詩がたった100年前に盛んだったんだと知り、驚きました。自分達で漢詩を作ると言われたときは、出来るか不安でしたが、思っていたよりも良いものができましたと思います。70分がとても短く感じました。
- B 漢文を実際につくってみると、ルールがむずかしい上、意味なども考えて作るのが本当に難しかった。でも、考えるうえでもっといい文ができそうとおもったりしてとても楽しかった。今回の講座をうけて、教育学科もいいなと思った!
- C 漢詩などを作ったことがなかったのではじめは作れるか心配だったのですが、班の人たちの協力と、先生が単語を用意してくれたおかげでとても楽しく漢詩を作ることができました。今まではそこまで漢詩に興味はなかったけれど、今回の講義で今まで以上に漢詩に興味を持つことができました。次回の国語の単元は漢文なので、今回の講義が役に立ってほしいなあと考えてます。
- D 普段の漢詩の勉強では、漢熟語の意味や作者

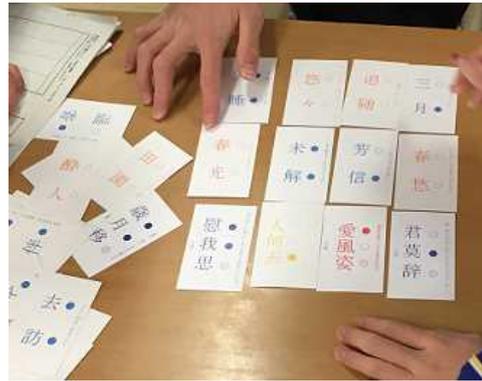
の意図などがあまり良くわからず、あまり面白くないのですが、今回の授業では、漢熟語とその意味が書かれた紙を組み合わせるだけとは言っても、作者視点で漢詩に触れることができたので、とてもためになりました。またこういう機会があれば良いなあと思います。

感想によれば、漢詩への抵抗が薄れたり、面白さや達成感を感じたりした生徒が少なくなかったようである。

また、2016年度には横浜国立大学教育学部附属横浜中学校の二年生に対し、修士課程の大学院生胡亦楽が漢詩カードを用いた授業実践を行っている<sup>15</sup>。三月上旬に、四十五分授業を三回行い、漢詩に関わる知識の整理、実作、作品の発表・講評にそれぞれ一時間ずつ割り当てたが、生徒たちは実作を含めいずれにも熱心に取り組んでいた。

なお、この授業では、胡氏の工夫により、漢詩カード六種類の文字色を六色に分け、平仄の理解が及ばない生徒でもカードの色で置くべき場所が分かるようにして行った。その工夫もあって、より順調に作品作りに取り組めたようである。

(図7 実作の様子)



以上のように、大学生のみならず、中学生・高校生であっても漢詩実作の授業は不可能ではない。また、今回は入門として、七言絶句をグループワークで作る授業の提案をしたが、漢詩カードは、七言絶句以外にも、対句や柏梁台聯句の実作にも活用できる。対句が作れるようになれば、律詩の実作も可能になる。また柏梁台聯句は個人で句を作る練習になり、かつクラスで一つの作品を作り上げることも可能であるため、グループワークの次のステップとなるだろう。

#### 4、今後の課題

江戸後期から明治前期にかけて、日本人の漢詩初学者が実作を行う場合、往々にして詩語書を用いてきた。漢詩カードは詩語書の機能をカード化したものであるから、伝統的な入門者の実作方法により近い形で、漢詩実作に触れることができる教材である。また、カードの形式であるため、作業の進捗が視覚的であり、共有しやすく、グループワークにも対応できる利点がある。

しかしその一方で、解決すべき課題や問題点もある。以下に四点を挙げたい。

第一に、漢詩カードを用いた実作の授業では、詩語の用法や語順などについては、必ずしも正確を期することができない。また、内容についても、詠いたいことを表現するのは難しい。実作経験の豊富な教員でない限り、学生・生徒の求める語彙や表現を、その場で補足することも困難であろう<sup>16</sup>。だが、本教材は漢詩に親しむ前段階として、実作に触れるためのものであり、内容や詩語の吟味、より正確な表現・語順などについては、入門を経て、多くの作品を読み、実作を重ねる中で磨いていくべきものである。この点は詩型を把握す

るための入門教材であるという以上、やむを得ないことではないかと思う。

第二には、カードに書き込める情報量に限界があることである。カードに載せる書き下しや意味は原則として各一種類であるため、複数の解釈や読みが可能である場合に対応できず、殊に対句の作成が難しくなるという点に配慮が必要である。例えば「日没」を「にちぼつ」と名詞的に読んでいた場合、「月来たる」と対句となり得ることを見落とす可能性がある。しかしカード一枚あたりの情報量を増やすと、詩語そのものが見にくくなるため、全ての読みの可能性を書き込むことも望ましいとは言い難い。

また、意欲的な生徒・学生は、詩語書を用いる場合には他の項目などにも目を通しながら、積極的に幅広い詩語を取り込んでいくことも可能であるが、詩語カードでは別項目を参照することができず、所与の語彙の中で作業せざるを得ないという不自由もある。もちろん、生徒・学生の要望に応じ詩語書などから語彙を拾い、適宜カードを追加することも可能であるが、その対応には、教員が実作に慣れ、詩語に馴染んでいる必要がある。

四つ目には、詩語カードのみならず詩語書など詩語を集めたツールには、人生の憂いや酒、望郷、挫折などの主題に即した詩語が多く載録される一方で、学校生活やスポーツ、卒業、恋愛など中学生・高校生が詠いたい題材に即した詩語が非常に少ない点も今後の課題と言える。漢詩実作を嗜む現代人には、しばしば同時代的な題材を取り込むこともある。漢詩の題材を幅広く求め、時代に合った詩語を用意することが、生徒・学生の漢詩への興味を深め、抵抗感を薄らげる可能性もあろう。学校現場での実作に際しては、既存の詩語のみならず、今後新しい詩語を取り込むことも視野に入れるべきかもしれない。もちろん、詩語を無尽蔵に増やせば、カードで簡便に詩を作るという当初の目的から乖離する可能性が出てくるため、適正な枚数については今後も検討が必要となろう。

これら、詩語の量や題材の幅の問題は、紙媒体のカードでは細やかな対応が難しい。その点は、デジタル教材化によって詩語のデータベースを拡張し、生徒・学生のレベルや要求、授業の目的に合わせて、適切な範囲の詩語を授業に活用するこ

とで対応可能となるかもしれない。すでに漢詩実作に資するウェブサイトやアプリが存在し、人工知能領域でも近体詩実作に関する研究が行われている<sup>17</sup>。紙媒体以外の漢詩実作ツールの可能性については、今後の課題としていきたい。

<sup>1</sup> 大学では高橋良行「電腦漢詩作法試論——漢詩教学の一環として——」（『中国詩文論叢』21、pp7-26、2002）、小学校では谷口匡「実践研究報告 音読から創作へ 京都小学校「ランゲージ」における漢詩の授業」（『新しい漢字漢文教育』42、pp50-58、2006）などの先行実践があり、いずれも詩語表・詩語集を活用している。

<sup>2</sup> 詩語表・詩語集とは作詩の助けとするために詩語を集めた表形式もしくは書籍形式のもの。また、本論においては、詩語とは七言句を〔二文字＋二文字＋三文字〕、五言句を〔二文字＋三文字〕に分割したときの、二文字または三文字のまとまりをいう。語として熟しているか否かは問わない。

<sup>3</sup> ただし第四句は孤平。

<sup>4</sup> 『子規漢詩の周辺』（明治書院、1996）所収。

<sup>5</sup> 『広島大学大学院文学研究科論集』68、pp1-9、2008。

<sup>6</sup> 『幼学便覧』には同名異書が多くあるが、清水房雄氏によれば伊藤鳳山撰の弘化二年（1845）刊本をいう。

<sup>7</sup> 中国の漢詩であれば、ホトトギスは暮春の鳥として描かれるが、日本においては、ホトトギスは初夏の鳥であり、漢詩の教本でも軒並み夏の部に採録されている。

<sup>8</sup> 五言絶句の第一句は原則として韻を踏まないため、子規は「転句」の詩語の中から「孤月下」を取っている。

<sup>9</sup> 正岡子規が幼いころから外祖父大原観山の漢学塾に通い、漢学を修め、漢詩を学んでいたことなどは、加藤国安『漢詩人子規 俳句開眼の土壤』（研文出版、2006）に詳しい。加藤氏によれば、「聞子規」詩を作った時期までに、子規は唐・白居易「琵琶行」などもすでに学んでいたという。

<sup>10</sup> 「我が俳句」（『子規全集 第四巻 俳論俳話一』所収、講談社、1975）より。文中の「詩語粹金」は、清水房雄「『幼学便覧』私考」（前掲）によれば「聞子規」詩作成時に参照した『詩韻碎金 幼学便覧』のこと。

<sup>11</sup> 孤平、同字重複の回避などはクラスの理解度などにあわせて適宜加える。下三連はカードを作る段階で避けられるが、必要であれば説明してもよい。冒韻はカード配布の時点で避けるのでなければ、韻字表を使って避けるよう指導することになる。ただし、幕末・明治期にも冒韻の作品は少なくないため、（ことに初学者は）冒韻を避けなくてもよいのではないかと論者は考えている。

<sup>12</sup> 律詩は対句を作ることが困難であり、五言詩は一句ずつの情報量が少ないため、七言よりも却って作りにくいとされる。

<sup>13</sup> 太刀掛重男編、漢詩書刊行、1963年初版、1991年再版。

<sup>14</sup> 詩語集を含む作詩の教本は、中国においても明清を中心に多く作られているが、それらは原則として天地人の分類によって項目が立てられている。日本においても当初は中国式の天地人の分類による詩語書が編纂・出版されていたが、江戸時代中期以降、その主流が四季と雑の分類へと変化する。公家や僧、武家の嗜みであった漢詩が、町民へも拡大していく時期とその変化の時期とは重なりあっており、四季の枠組で漢詩を作ることが、漢学の造形が深くない層には馴染みやすかったのであろうと考えられる。詳しくは拙論「江戸期の初学者向け作詩教本に見える分類方法について」（『新しい漢字漢文教育』63、pp20-30、2016）を参照されたい。

<sup>15</sup> 『教育デザイン研究』9、pp262、2018。

<sup>16</sup> 作品の添削については石川忠久『漢詩の稽古』（大修館、2015）が参考になる。

<sup>17</sup> 邱楓・中村恵一・古宮誠一「漢詩推敲システム 漢詩が持つ制約と詩語表の利用による支援」（『電子情報通信学会技術研究報告 ET 教育工学』112(300)、pp31-36、2012）、石田勝則「漢詩添削 WEB サイトについて 漢詩の出来栄への評価方法」（『人工知能学会全国大会論文集』JSAI06(0)、pp157-157、2006）など。

（横浜国立大学）